

(川内市東大小路町)

位置と環境

大島遺跡は川内川下流の右岸で、川内川と薩摩国分寺跡との中間位置に所在している。標高は4～6mであり、周囲の水田地帯より一段高い自然堤防上に位置し、遺跡は一部畑地が残るものの多くは宅地となり、また周辺の水田は造成され市街地化が進んでいる。

調査の経緯

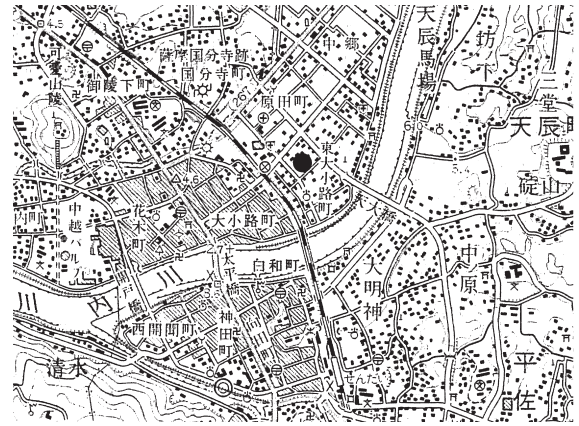
遺跡は九州新幹線鹿児島県ルート建設に伴い、鹿児島県教育委員会が平成12年度から平成13年にかけて調査を実施した。路線内の橋脚が建設される部分のみの調査を基本としているが、住居跡などの遺構が広がる部分については橋脚以外の部分も調査を実施した。

遺構と遺物

調査の結果、本遺跡は縄文時代・弥生時代・古墳時代・奈良～平安時代、中世の複合遺跡であり、その主体は奈良～平安時代である。

弥生時代と古墳時代の遺構は、それぞれ竪穴住居跡が検出され、甕や壺のほか石庖丁などが出土した。また、古墳時代では土壙墓も発見されており、副葬品として大刀・剣・鉄鏃などが出土した。

奈良～平安時代の遺構では、30軒を越える竪穴住居跡と若干の掘立柱建物跡及び土坑などが重複して検出された。数多くの住居跡が重複していることは、



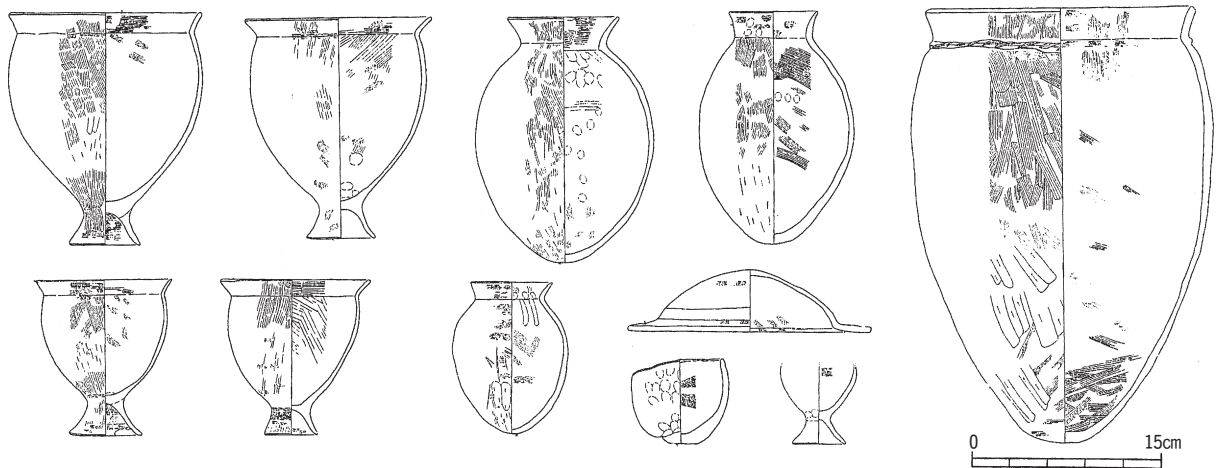
第1図 大島遺跡の位置

周囲を水田に囲まれた自然堤防という立地的条件のなかで、遺跡が継続的に居住が行われたためと推定される。

出土した遺物は、土師器の坏・埴・蓋・皿・甕・鉢や須恵器の坏・蓋・甕・壺、越州窯青磁・緑釉陶器・玉類・青銅製品、鉄製品、古代瓦などが発見された。また、当時役人等が使用したと推定される帯金具の石帯（丸軋）も2点出土し、本県初の石帯の出土である。須恵器では、本県で出土例のない二面硯や、蓋を転用した転用硯を出土している。さらに、金環が2点出土した。

本遺跡は、このように出土遺物の多様性及び本県でも希少なものが多いということよりも、本遺跡の重要性が理解できる調査結果となった。

中世の遺構としては、掘立柱建物跡のほか畠跡も検出された。中世の遺物では、滑石製品鍋や青磁・白磁などが出土した。



第2図 弥生時代の土器

特徴

本遺跡は、古代の集落として、国府・国分寺跡に近接した位置から、かつ希少な遺物も多いことよりそれと何らかの関係が推定される遺跡が考えられる。

資料の所在

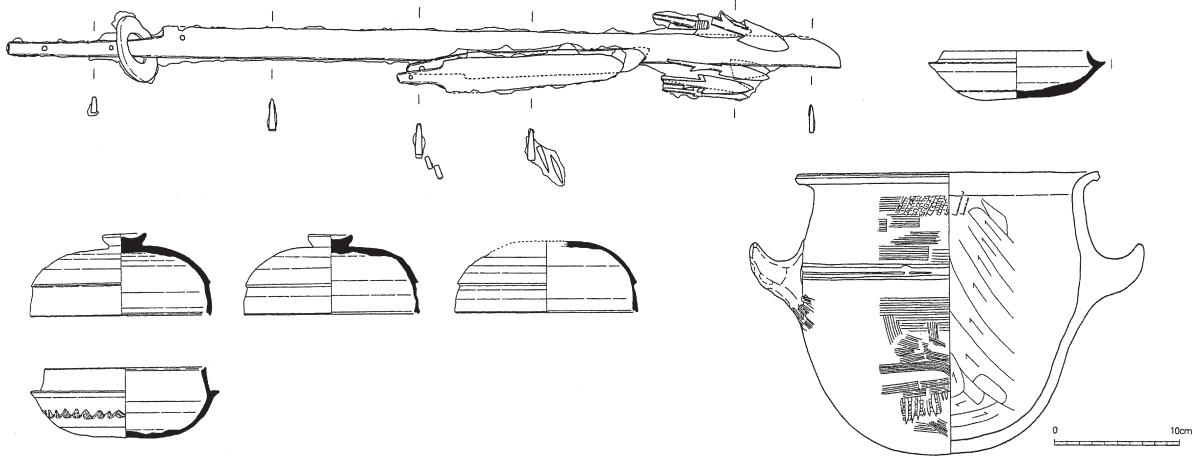
出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保

管されている。

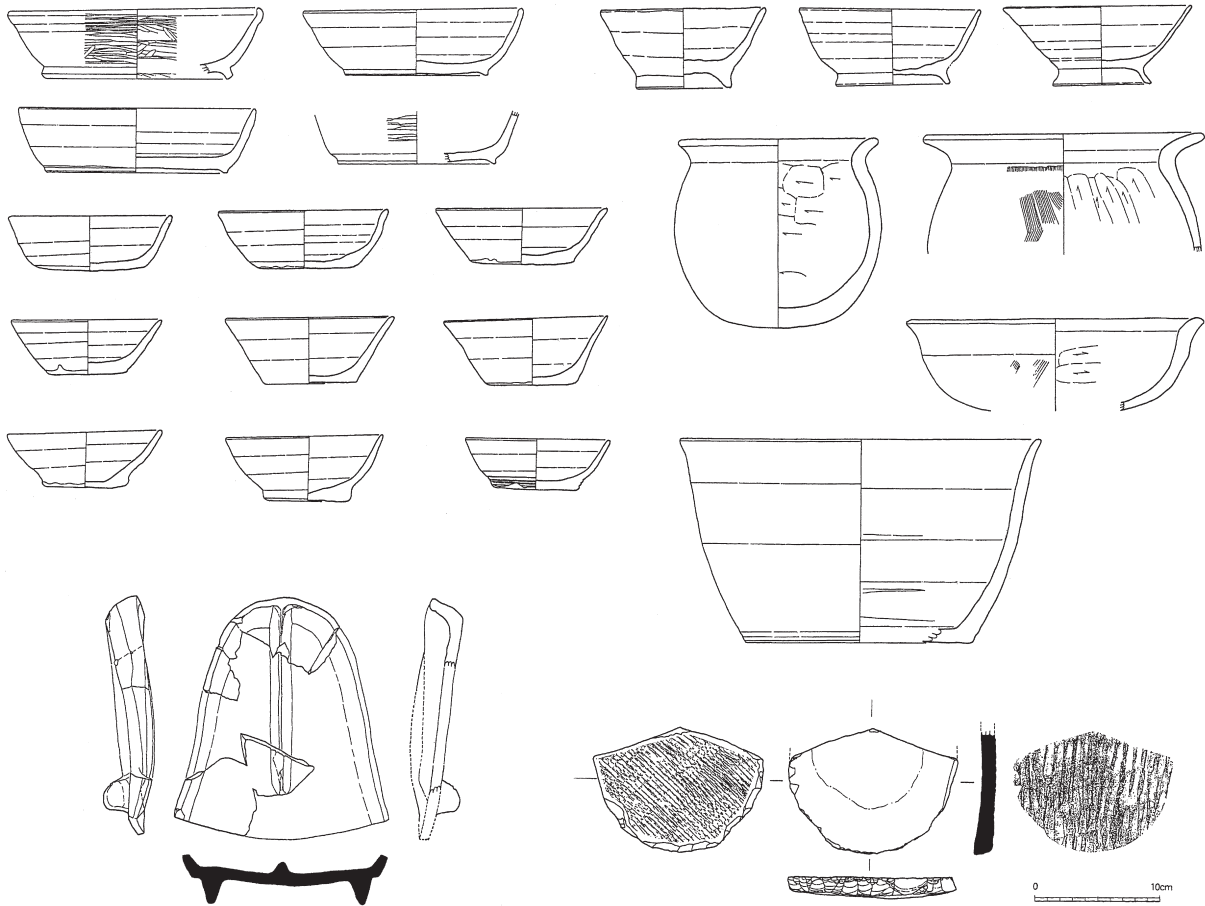
参考文献

鹿児島県立埋蔵文化財センター2005「大島遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』80

(宮田栄二)



第3図 古墳時代の遺物



第4図 古代の遺物